

人文地理第59巻第5号抜刷
2007年10月29日発行

人文地理学のアイデンティティを考える

——都市地理学を中心に——

阿 部 和 俊

人文地理学のアイデンティティを考える

——都市地理学を中心に——

阿 部 和 俊

I はじめに	変化
II 第2次世界大戦後の日本の都市地理学の研究動向	III 人文地理学と他の人文・社会科学との相互関係
(1) 都市を点としてとらえる研究(点的分析)と面としてとらえる研究(面的分析)	(1) 3誌にみる研究文献の引用状況
(2) 研究視点からみた都市地理学の研究動向	(2) 『社会学評論』にみる研究文献の引用状況
(3) 分析結果の記述スタイルにみられる	(3) 単行本にみる研究文献の引用状況
	IV おわりに

キーワード：人文地理学のアイデンティティ、都市地理学、点的分析、面的分析

I はじめに

この小論のポイントは、都市地理学を中心に人文地理学のアイデンティティを考えるということにある。人文地理学のアイデンティティを考えるというテーマであれば、人文地理学全体を視野に入れなくてはならないが、現時点では、それは筆者の手に余るので、専門の都市地理学を切り口に検討を進めていきたい。

最初に、第2次世界大戦後、今日にいたるまでの日本の都市地理学の成果をまとめたい。二番目に、それを受けて人文地理学全体を考えていくが、その際具体的には『地理学評論』『人文地理』『経済地理学年報』3誌に掲載された人文地理学の論文が、どのように他分野の成果を引用してきたかということを中心に論をすすめる。そこには人文地理学者自身の人文地理学に対する意識をも読み取ることができるからである。

三番目に、反対に他分野が人文地理学の成果を

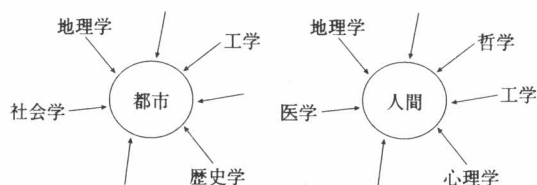
どのように引用しているかということを検討する。これをみることによって他分野の人文地理学に対する評価の一端をみることができると考えられる。しかし、今回は時間的な制約から社会学を中心に検討する。

続いて、二番目、三番目と同様の検討を単行本に対して行い、最後に総括を行うこととする。

II 第2次世界大戦後の日本の都市地理学の研究動向

都市地理学は都市を地理学的に研究する分野である。しかし、ここでは都市とは何かという定義については言及しない。¹⁾そして、もちろん都市は都市地理学のための独占的な研究対象ではない。社会学も工学も歴史学も都市を研究する。それは、人間をさまざまな分野が共通の研究対象としているのと同じである(第1図)。

地理学、とくに人文地理学も人間を研究対象とするが、人間そのものというより、人間の行為や



第1図 研究分野と対象

Figure 1. Research subject and disciplines

行為の結果に強い関心があることは言うまでもない。しかし、空間認知という点からの研究は人間そのものに焦点が当てられる傾向がある。後述す

る。

都市地理学の成果を整理するには、様々な観点があるが、ここでは(1)都市を点として分析するか、面として分析するか、(2)「都市を」研究しているのか、「都市で」研究しているのか、(3)分析結果の記述スタイル、の3点から戦後の日本の都市地理学の成果を検討していこう。

(1)都市を点としてとらえる研究(点的分析)と面としてとらえる研究(面的分析) この観点は、都市地理学の成果を整理するときに一般的にとら

第1表 都市地理学論文数(1945~2005)

Table 1. Number of urban geography articles (1945~2005)

			1945～ 1950	1951～ 1960	1961～ 1970	1971～ 1980	1981～ 1990	1991～ 2000	2001～ 2005
都市地理学論文	点的分析	都市比較 都市分類 都市イメージ	2	5	6	3	1 (1)	3	2
		都市化 都市成長	1	4	4	1	1 (1)	4 (1)	2
		都市圏	2	10	20	11	9 (3)	5	3
		中心地システム 中心地	0	6	11	11	11 (1)	7 (2)	0
		都市システム	0	1	1	10	27 (1)	20 (2)	8 (1)
		都市機能全般	0	4	13	19	21 (1)	26	17
		居住地 住宅地	0	0	0	0	4	2	3
		小計	5	30	55	55	74 (8)	67 (5)	35 (1)
	面的分析	都市誌 都市景観 都市形態	1	1	0	0	1 (2)	1	3
		都市化 都市成長	0	2	11	13	8	3 (2)	0
		都市の内部構造 都心、C. B. D.、商店街	1	17	26	37	33 (1)	37 (3)	16 (6)
		都市機能全般	1	3	4	20	19 (2)	22 (3)	26 (2)
		居住地 住宅地	0	1	4	14	22 (2)	18 (1)	18 (4)
		小計	3	24	45	84	83 (7)	81 (9)	63 (12)
		展望論文	0	6	12	13	19	17 (1)	6
		分類不能	0	0	2	4	5 (6)	3 (1)	10
	計	8	60	114	156	181 (21)	168 (16)	114 (13)	
	人口地理学論文		2	24	19	16	22 (1)	29 (1)	11 (3)
	交通・流通地理学論文		2	20	10	20	29 (2)	23 (2)	18

『地理学評論』、『人文地理』、『経済地理学年報』、『東北地理(季刊地理学)』、『地理科学』の合計

『人文地理』の刊行は1948年から

『経済地理学年報』の刊行は1954年から

『東北地理』の刊行は1948年から

『地理科学』の刊行は1961年から

展望論文として分類したものの中には、筆者の判断で各誌の「展望」欄以外に掲載されたものも含まれている

人口地理学、交通・流通地理学論文で、都道府県を単位として分析されたものは含まれていない

() は *Geographical Review of Japan Ser. B* の論文で外数

第2表 地理学の主要5学術誌に掲載された都市地理学論文数と人文地理学論文数(1945~2005)

Table 2. Number of urban geography and human geography articles published in the five major journals of geography

	1945~1950	1951~1960	1961~1970	1971~1980	1981~1990	1991~2000	2001~2005
都市地理學論文數 (A)	8	60	114	156	181 (21)	168 (16)	114 (13)
人文地理學論文數 (B)	104	693	705	750	700 (54)	788 (75)	412 (48)
A/B × 100	7.7	8.7	16.2	20.8	25.9 (38.9)	21.3 (21.3)	27.7 (27.1)

注) () は *Geographical Review of Japan Ser. B* の論文で外数。

れてきた。第1表は、この観点から1945～2005年の『地理学評論』『人文地理』『経済地理学年報』『東北地理（季刊地理学）』『地理科学』に掲載された都市地理学の論文を整理したものである。これら5誌を対象としたのは、いずれも長い歴史をもっているうえ、査読制度を採用していることから、掲載論文は一定以上の水準にあると考えられるからである。都市地理学の論文は、この他にも各地の地理学会発行の雑誌にも、また大学などの紀要にも数多く掲載されている。しかし、ここでの検討はこの5誌に限りたい。これら5誌の掲載論文によって、日本の都市地理学論文の研究傾向を推しはかることは、無理のないことと判断される。

第1表は筆者の基準によって上記期間の都市地理学の論文をまとめたものである。第1表から、日本の都市地理学の傾向を次のようにまとめることができよう。

①第2次世界大戦後、都市地理学の論文数は増加してきた。それは1980年代にピークを迎えたが、1990年代には減少した。そして、2001～2005年にかけて再び増加傾向にある。この5年間の都市地理学の論文数は63本 (*Geographical Review of Japan Ser. B* の論文を加えれば127本) なので、単純に2倍すれば、2001～2010年では126本 (同150本) の論文数ということになる。

第2表はこの5学術誌に掲載された人文地理学の全論文数とそこに占める都市地理学論文数の比率を示したものである。1960年代に都市地理学の論文数の比率が急増し、1980年代には25.9%にも達した。*Geographical Review of Japan Ser. B*

においては38.9%にも達した。1990年代ではやや低下し、2001～2005年では少し盛り返したことがわかる。

このように都市地理学の論文数は1980年代に多く、1990年代に入って減少気味であったが、2001～2005年には再び増加傾向にあることがわかる。しかし、言うまでもなく重要なことは、21世紀に入って論文数が増加傾向にあるものの、その内容は1990年代までとは異なるということである。

②点的分析の研究と面的分析の研究とに分けると、1970年までは前者の方が多かったが、1971年以降逆転し、それは現在も続いている（第1表）。21世紀に入ってからはこの傾向はさらに明確になった。*Geographical Review of Japan Ser. B* においてはより明確である。現在の傾向が続けば、点的分析の研究は2001～2010年ではほぼこれまでの論文数となりそうであるが、面的分析の研究はさらに増加しそうである。

都市の点的分析の研究は、どの分野においても論文数が減少しているが、とくに「中心地システム・中心地」と「都市システム」の論文数の減少が著しい。前者は21世紀に入ってから5年間に⁴⁾おいて論文は0である。とくに中心地研究の減少が都市の点的分析の減少の要因なのである。

③面的分析の研究において長い間論文数が多かったのは「都市の内部構造・都心・C. B. D.・商店街」の研究であったが、1970年代に入って「都市機能全般」の論文数が急増した。前者は21世紀に入ってやや減少気味であるのに対して、後者は2001～2005年で既に26本の論文数である。詳しく

第3表 研究視点で分けた都市地理学の論文
Table 3. Articles on urban geography categorized by research perspective

区分 年	5誌合計		地理学評論		人文地理		経済地理学年報		東北地理 季刊地理学		地理科学	
	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B	A	B
1945～1960	53	8	22	5	19				12	3		
1961～1970	76	23	24	8	20	5	2	1	24	8	6	1
1971～1980	79	66	28	18	26	19	4	12	17	12	4	5
1981～1990	70	82	17(12)	15(7)	28	24	11	21	9	15	5	7
1991～2000	61	95	17(7)	26(6)	18	31	14	23	6	12	6	3
2001～2005	35	76	6(5)	23(6)	10	12	6	20	9	7	4	14

A：都市を研究した論文

B：都市で研究した論文

注) () は *Geographical Review of Japan Ser. B* の論文で外数。

は後述する。

④展望論文の数は、都市地理学の論文数の増加につれて当然のことながら増加してきた。

⑤一方、指摘しておくべき点は「分類不能」とされる論文数が増えてきていることである。筆者は第1表を作成するにあたり、都市地理学の各研究を出来る限り、いずれかの分野に振り分けるように分類した。しかし、近年、上記の分類にはあてはまりにくい研究が少なからず出てきている。この「分類不能」というカテゴリーに含まれる研究には、都市内の人間あるいは社会集団を研究した論文が多いが、その研究の特徴は何よりも人間そのものに強い関心が向けられていることである。

⑥都市地理学の隣接分野である人口地理学・交通地理学・流通地理学の論文数をみると、ともに1950年代に入って論文数が増加し、1960年代、1970年代はやや論文数は停滞するが、1980年代以降再び増加傾向にある。第1表の論文数は市町村を分析単位としたものであり、とくに人口地理学の場合はこのほかに都道府県単位での研究が少なくないことを付加しておく必要がある。

(2)研究視点からみた都市地理学の研究動向
ここでいう研究視点とは、ある論文が「都市を」（都市を目的として）研究したものであるのか、「都市で」（都市をフィールドとして）研究したものであるのかということである。ややわかりにくいかもしれないので、少し詳しく説明しておこう。

筆者は1973年に「日本の主要都市における経済的中枢管理機能に関する研究」という論文を『地理学評論』に発表した⁵⁾。このタイトルでは、論文は日本の主要都市における経済的中枢管理機能を研究していることになる。しかし、この論文は経済的中枢管理機能を指標として日本の主要都市を検討したものであった。したがって、論文のタイトルは正しくは「経済的中枢管理機能からみた日本の主要都市」とするべきであった。前者のタイトルでは論文は都市をフィールドとして都市機能を研究したものとなるが、後者の立場が都市を目的として研究したものといえる。

この経験は筆者に都市地理学の研究を再分類する契機を与えた。筆者は都市地理学とは「都市を」地理学的に研究するものであるとアプリオリに考えていたが、学術誌に掲載された諸論文を再精査すると、「都市で」研究したものも少なくないことに気がついたのである。

第3表は第1表の論文を「都市を」研究した論文と「都市で」研究した論文とに分けたものである。ただし、この判断は筆者自身が行ったものである。そして、どちらとも判断できない論文も少なくない。そういった論文はどちらにもカウントできないので、論文数は2つの表で一致していない。

第3表を見ると、興味深いことに気がつく。第2次世界大戦後、しばらくの間は「都市を」研究

した論文の方が多いが、1970年代に入って両者の論文数は接近する。1980年代に逆転して、現在まできている。そして、近年、この傾向はますます強くなり、2001～2005年では、「都市を」研究した論文は「都市で」研究した論文の半分以下である。

先に都市の面的分析の研究は増加してきたが、「都市の内部構造・都心・C. B. D.・商店街」研究の数は減少し、「都市機能全般」の研究数が増加してきたことを指摘した。つまり、このことは研究者の関心が都市の内部構造全体を研究するよりも、都市をフィールドとして都市機能の状況を研究することの方に向いてきていることを意味している。

具体的に言えば、複数の指標を整理して都市の内部を商業地区や業務地区に分けるとか、都心やC. B. D.の範囲を画定して都市間比較を行うとか、商店街を区画して、その性格を分析するというよりも、都市の内部で大企業のオフィス、大規模小売店や小売チェーン店、コンビニエンスストアがどのような状況にあるかということ进行分析することへの関心が強くなっているということである。

以上のことから、近年の日本の都市地理学は、都市を面として分析し、「都市で」（都市をフィールドとして）何かを研究している論文が多くなっているということがわかる。

さらに具体的に表示をしていないが、計量的手法を使用した論文数が減少していることに注意が必要である。なぜならば、このことは都市地理学の研究に人間そのもの、もしくは社会集団に注目するような傾向が出ていることと表裏一体の関係をもっているからである。筆者の調査によれば、5誌において計量的手法を用いた都市地理学の論文は、1960年代17本、1970年代51本、1980年代86本、1990年代56本、2001～2005年12本である。⁷⁾

以上のことから、戦後から今日にいたる日本の都市地理学の潮流が明らかになったが、最近の動向にポイントをおいて、重要な点をまとめると次のようになる。

①点的分析の研究の減少 ②面的分析の研究の増加 ③都市機能研究の増加 ④計量的手法を用いた研究の減少 ⑤人間そのもの、もしくは社会集団に注目した研究の増加 ⑥従来のカテゴリーでは分類されることが難しい論文の増加 そして、⑦「都市で」研究する論文の増加である。

これらのうち、この小論との関係でいえば、「都市で」研究する論文の増加と人間そのものや社会集団に注目した研究の増加が重要である。なぜならば、この2つの観点は他の人文・社会科学と共通するからである。

さらにこれまでとは異なる2つの観点からの検討を試みたい。1つは研究視点であり、もう1つは執筆のスタイルである。

研究視点については先に点的分析と面的分析、さらに「都市を」と「都市で」という観点からの整理を試みた。そして、後者の研究が増加傾向にあることを指摘した。つまり、最近の日本の都市地理学は都市そのものを研究するより、都市を面としてとらえ、都市をフィールドにしている傾向が強いのだが、この点について更に述べていきたい。

⁸⁾ 杉浦は「生活実態および施設選択行動の両面にわたる実態把握を基礎に、特別養護老人ホームの入所者がいかなる生活上の現実的要因によって施設入所を果たし、それは今日考えられる施設入所に限定した場合の理想的状況とどのようなギャップを示す内容であるのかを検討する」という観点からの論文を書いている。これは筆者には地理学の論文の問題意識とは思えない。

⁹⁾ 中村は、「大都市近郊における、多様な住民から構成される地域社会の特性を明らかにするため、住民が形成する近隣での社会関係を2種類の社会的ネットワークの視点から」考察した。この問題意識は都市社会学のものではないだろうか。

ここには2つの例を挙げただけであるが、類似した研究視点つまり都市をフィールドとして何か

を研究するという視点は既述したように、最近では、珍しくない。しかし、筆者はこの傾向が今以上に強まれば都市地理学は分解すると考えている。

さらに、研究対象となった人物の行動パターン、¹⁰⁾ ライフコースやライフヒストリーが詳細に記述された研究が少なくない。¹¹⁾ ここには時間地理学の影響をみてとれる。

既に指摘したが、都市地理学を含む人文地理学が人間の営為とその結果を研究する学問である以上、人間の行動・思考・意志・知覚、そして広く生活を取り上げることは当然のことである。しかし、人間の行動パターンやライフコース、ライフヒストリーを詳しく取り上げるということの意味するところは一体何なのだろうか。そのインプリケーションは何なのだろうか。

(3) 分析結果の記述スタイルにみられる変化
続いて分析結果の記述スタイルの変化について述べてみよう。ここで指摘したいことは、昨今の研究では論文中に被調査者の生の声が記述されている論文数が増加したということである。筆者の調査によれば、2001～2005年の上記5学術誌の都市地理学と人口地理学の論文の中で16本の論文がインタビューなどによって得られた生の声を論文中に記述している。あるいは8本の論文が新聞・雑誌の記事をそのまま論文中に掲載している。

たとえば、都市地理学における「住宅地」研究は、住宅地の場所に対する分析(規模の分析も含む)が中心であった。そこに住むかどうかを決めるのは間違いなく人間であるから、人間の判断は「居住地選考」という項目によってまとめられていた。つまり、「価格が手頃であった」とか「立地場所が良いから」という項目で人間の意志はまとめられていた。それが、最近では居住地を決定するに至った経緯、あるいは判断する際の心情などの生の声を掲載する研究論文が少なくないということである。

周知のように、人間の生の声を採録し、論を構成していく手法は民俗学では一般的である。また、

個人の意見や判断などに筆者が手を加えずに、そのまま記述する手法は社会学において一般的である。こういう手法を使用する都市地理学者はこれから他学問との関係をどのようにしていこうと考えているのだろうか。

III 人文地理学と他の人文・社会科学との相互関係

Ⅱでは戦後日本の都市地理学の動向を整理した。そこでも都市地理学の独自性やアイデンティティに言及したが、ここからは、広く人文地理学と他の人文・社会科学との関係を、人文地理学のアイデンティティにポイントをおいて考えていきたい。この問題は色々な観点から検討できるが、筆者は研究文献の相互引用に注目したい。検討対象は1971～1975年(以後、前半という)、2001～2005年(以後、後半という)の『地理学評論』『人文地理』『経済地理学年報』に掲載された人文地理学の論文—論説・短報・研究ノート—と無作為に検討した都市地理学の単行本である。単行本については最近のものを検討した。

この2つの年代を採用するのは、後半は最近の状況を知るためであり、前半は筆者が地理学界に足を踏み入れた頃であり、時代の雰囲気を感じることができたからである。また25～30年という隔たりは「変化」(があるとすれば)を把握するには適切な間隔でもあろう。

(1) 3誌にみる研究文献の引用状況 第4表は、3誌掲載の人文地理学の論文数と1本の論文の平均引用文献数である。引用文献とは、研究論文、単行本、訳本のことである(この詳細については第5表の注記を参照)。

第4表から興味深いことがわかる。『人文地理』掲載論文は1971～1975年も他2誌に比べて引用文献数が多いが、3誌とも前半に比べて後半は大きく引用文献数が増加していることである。この間に1本あたりの引用文献数はほぼ倍増した。この理由は次のように考えられる。(i)この間に研究成

第4表 3誌における人文地理学の論文数と平均引用文献数

Table 4. Number of human geography articles and the average number of studies cited in an article in *Geographical Review of Japan*, *Japanese Journal of Human Geography* and *Annals of the Japan Association of Economic Geographers*

	3誌合計		地理学評論		人文地理		経済地理学年報	
	人文地理学 論文数	平均引用 文献数	人文地理学 論文数	平均引用 文献数	人文地理学 論文数	平均引用 文献数	人文地理学 論文数	平均引用 文献数
1971	48	11.0	28	7.4	20	12.3	10	7.7
1972	48	11.0	17	4.7	23	16.6	8	8.3
1973	64	9.5	33	7.4	21	13.5	10	8.0
1974	53	8.5	23	7.5	18	9.7	12	8.6
1975	57	10.7	29	5.8	19	18.5	9	10.1
2001	56	19.0	24	24.2	19	27.2	13	18.3
2002	57	23.2	23	23.4	18	25.7	16	19.9
2003	60	25.1	28	22.2	17	33.5	15	20.8
2004	44	21.4	18	24.7	15	22.0	11	15.1
2005	63	19.7	28	20.1	18	20.7	17	18.0

注) 『経済地理学年報』は、1971～1975年は年2冊、2001～2005年は年4冊刊行。

果は増加したので、必然的に引用文献数は多くならざるを得ない。(ii)最近の研究は、地理学以外の研究を数多く引用するようになった、の2点である。以下、この(ii)の点に着目して検討していこう。人文地理学はどういった分野の研究を引用しているのだろうか。3誌を具体的にみてみよう(第5表)。

『人文地理』の場合、歴史学からの引用が多いが、前半に比べて後半は、その比率は減少気味である。経済学からの引用も同じ傾向にある。そして、注目すべきは社会学からの引用が後半急増していることである。『地理学評論』は前半、後半とも経済学からの引用が最も多い傾向にあるが、『人文地理』同様、後半は社会学からの引用が増加した。『経済地理学年報』の場合、前半は圧倒的に経済学からの引用が多い。後半も経済学からの引用が多いが、前半ほど圧倒的ではない。また、3誌とも都市学からの引用が増加した。おしなべて、突出した分野からの引用という側面は希薄になった。そして、3誌とも「その他」の分野からの引用が増えている。

そして、何よりも地理学の研究成果の引用の占める比率が低下していることに注目する必要がある。前半では雑誌によるバラツキが大きいが、後

半では同じような傾向を示す。後半では50%をこえる雑誌は1つもない。因みに、この間最も比率が高かったのは1971年の『地理学評論』である。この年は同誌掲載の人文地理の論文28本での全引用文献数は207で、このうち地理学文献の引用が146(70.6%)であった。

以上のように引用に占める地理学研究の率は低下傾向にあるが、このことはどのように解釈されるのだろうか。地理学者の地理学に対する評価が低くなったのか。それとも地理学者の関心が多岐にわたるようになったのだろうか。後者の考えを示すことの1つは「その他」の分野からの引用が増えたことである。『地理学評論』の場合、「その他」の分野の率は前半は9.2～16.8%であるが、後半では23.2～36.3%である。『人文地理』では、同6.5～14.8%と同12.6～34.7%、『経済地理学年報』では、同1.2～15.2%、同3.8～19.9%である。

以上のことを再確認するために作成したのが第6表と第2図である。この第6表には各年次、全体の5%以上を占めたもののみ掲載しているが、あらためて傾向をまとめておくと(i)前半は歴史学からの引用が多かったが、(ii)次第に経済学からの引用が歴史学にとってかわること、(iii)引用分野が多岐にわたるようになったが、(iv)社会学からの引

第5表 『地理学評論』『人文地理』『経済地理学年報』における引用文献の分野別状況

Table 5. Share of disciplines cited in human geography articles in *Geographical Review of Japan*, *Japanese Journal of Human Geography* and *Annals of the Japan Association of Economic Geographers*

	地理学評論							人文地理							経済地理学年報				
	1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位		1 位	2 位	3 位	4 位	5 位	6 位		1 位	2 位	3 位	4 位	5 位
1971 (100.0)	地理 (70.6)	その他 (9.2)	歴史 / 経済 (7.7)				1971 (100.0)	地理 (43.1)	歴史 (34.6)	経済 (10.6)	その他 (6.5)			1971 (100.0)	地理 (59.7)	経済 (27.3)	その他 (9.1)		
1972 (100.0)	地理 (66.3)	その他 (16.3)	経済 (7.5)	歴史 (5.0)			1972 (100.0)	地理 (39.1)	歴史 (29.7)	経済 (16.8)	その他 (8.7)			1972 (100.0)	経済 (50.0)	地理 (22.7)	その他 (15.2)	都市 (6.1)	
1973 (100.0)	地理 (53.9)	歴史 (16.3)	経済 (13.9)	その他 (10.6)			1973 (100.0)	地理 (62.2)	歴史 (15.9)	その他 (11.3)	経済 (6.4)			1973 (100.0)	地理 (63.8)	経済 (33.8)			
1974 (100.0)	地理 (63.0)	その他 (16.8)	経済 (11.5)				1974 (100.0)	地理 (46.3)	歴史 / 経済 (18.3)		その他 (14.8)			1974 (100.0)	地理 / 経済 (46.6)				
1975 (100.0)	地理 (61.3)	経済 (12.5)	歴史 (8.3)	その他 (7.7)	都市 (7.2)		1975 (100.0)	地理 (51.0)	歴史 (17.9)	経済 (13.7)	その他 (8.0)	都市 (5.1)		1975 (100.0)	経済 (62.6)	地理 (23.1)	都市 (8.8)	その他 (5.5)	
2001 (100.0)	地理 (39.8)	その他 (24.3)	経済 (17.2)	社会 (9.3)			2001 (100.0)	地理 (40.2)	その他 (26.1)	経済 (12.4)	都市 (8.3)	歴史 (5.8)		2001 (100.0)	経済 (44.1)	地理 (39.5)	その他 (8.0)		
2002 (100.0)	地理 (41.4)	その他 (24.2)	経済 (13.9)	歴史 (6.7)	社会 / 都市 (5.8)		2002 (100.0)	地理 (36.9)	その他 (15.8)	歴史 (14.5)	社会 (14.0)	経済 (11.9)		2002 (100.0)	地理 (39.5)	経済 (28.8)	社会 (9.7)	都市 (8.5)	その他 (8.2)
2003 (100.0)	地理 (41.9)	その他 (25.3)	経済 (9.3)	社会 (8.9)	都市 (7.2)		2003 (100.0)	地理 (34.4)	都市 (19.1)	歴史 (15.3)	その他 (12.6)	社会 (7.9)	政治 (5.6)	2003 (100.0)	地理 (47.8)	経済 (39.4)			
2004 (100.0)	地理 (38.7)	その他 (36.3)	経済 (9.4)	歴史 (6.8)	社会 (5.2)		2004 (100.0)	地理 / その他 (27.6)		歴史 (11.2)	社会 (10.6)	政治 (7.9)	経済 (6.4)	2004 (100.0)	地理 (45.8)	経済 (23.5)	その他 (19.9)		
2005 (100.0)	地理 (42.0)	その他 (23.8)	経済 (10.6)	社会 (10.1)			2005 (100.0)	地理 (37.1)	その他 (34.7)	経済 (9.1)	社会 (6.7)	歴史 (6.2)		2005 (100.0)	地理 (47.7)	経済 (36.6)	都市 (7.5)		

注) 「その他」とは地理学 (人文地理学, 自然地理学), 社会学, 歴史学 (考古学を含む), 政治学 (法学を含む), 経済学 (経営学, 商学を含む), 都市学 (都市計画, 土木・建築の総称), 人口学以外の分野

数字は%。5%以上のもののみ掲載。

研究文献整理の原則

1. 主要地理学会会員 (以下, 地理学者という) の書いたものを地理学の成果とする。
2. 人物中心。市町村史などはカウントしていない。ただし, 担当した分担などが明確な場合, それぞれの分野にカウントする。
3. 地理学者が, 大学紀要や他分野の出版物, 地理学以外の本や雑誌に書いたものは地理学の成果とする。
4. 連名で書かれたものは1人でも地理学者が入っていれば, 地理学の成果とする。
5. 地理学者による, 単行本のなかの分担執筆は, 地理学の成果とする。
6. 外国語で書かれたものはカウントしていないが, 日本語に訳出されているものはカウントしている。
7. 卒業論文, 修士論文はカウントしていない。
8. 書評, 業績, 予稿集, 談話, 報告要旨, 解題, 口頭発表, 新聞記事はカウントしていない。
9. 科学研究費報告書はカウントしている
10. 白分白身の研究の引用はカウントしていない。

用が増加したこと、(v)とくに、「その他」からの引用が増加したこと。それは2004年には全引用文献の30%をこえている、といった点である。

以上のことは、どのように解釈されるのだろうか。否定的に解釈すれば、地理学者の地理学に対する評価が低下しているということになるし、肯定的に解釈すれば、地理学者の関心が多岐にわたるようになった一隣接分野の研究成果をも丹念に渉猟するようになった、—ということである。このことは、都市地理学の研究の整理を行った際にも指摘したように、人文地理学の存在そのものと深く関わっている。

(2)『社会学評論』にみる研究文献の引用状況 さて、ここで他分野の状況をみてみよう。例として2003～2006年の『社会学評論』をとりあげる。第7表は同誌の同期間の引用を都市学の代わりに哲学を入れて示したものである。まず、人文地理学と比較すると1本あたりの平均引用文献数が少ないことがわかる。そして、2005年は41.6%とやや低い、全体に自分分野からの引用が人文地理学より10ポイントほど高い。2003年には64.1%である。人文地理学に比べて、経済学より政治学からの引用が多い。また、哲学からの引用も多い。そして、地理学の研究成果は3つしか引用されていない。¹²⁾2001～2005年の地理学3誌には478(この数字は表示していない)もの社会学の成果が引用されているので、地理学にとっては圧倒的な入超である。¹³⁾

(3)単行本にみる研究文献の引用状況 ここで少し視点をかえて、単行本(著書)ではどのような状況になっているのであろうかということを見ていこう。第8表はアトランダムに選んだ10冊の地理学書について、先と同じ要領で引用文献を整理したものである。以下、重要な点を指摘していこう。

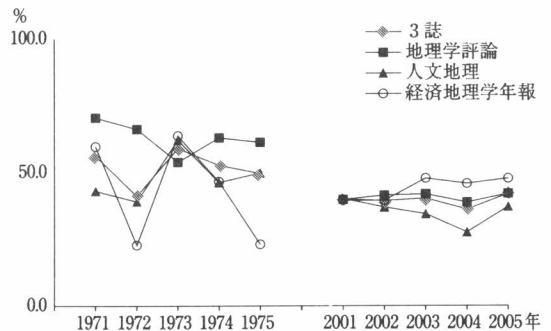
①地理学の文献の率が最高なのは『都市空間の立体化 増補版』(戸所隆)で75.5%、最低は『成熟都市の活性化』(成田孝三)で9.4%である。こ

第6表 3誌における引用文献の分野別状況

Table 6. Share of disciplines cited in human geography articles in the three major journals of geography

	1位	2位	3位	4位	5位	6位
1971 (100.0)	地理 (56.2)	歴史 (19.1)	経済 (11.9)	その他 (7.9)		
1972 (100.0)	地理 (41.2)	歴史 (22.6)	経済 (19.5)	その他 (10.6)		
1973 (100.0)	地理 (59.0)	歴史 (14.0)	経済 (13.0)	その他 (9.7)		
1974 (100.0)	地理 (52.8)	経済 (22.2)	その他 (13.1)	歴史 (8.9)		
1975 (100.0)	地理 (49.7)	経済 (20.7)	歴史 (12.6)	その他 (7.5)	都市 (6.2)	
2001 (100.0)	地理 (39.9)	その他 (22.1)	経済 (20.1)	社会 (6.1)		
2002 (100.0)	地理 (39.4)	その他 (17.3)	経済 (16.8)	社会 (9.6)	歴史 (7.9)	都市 (5.2)
2003 (100.0)	地理 (40.3)	その他 (16.0)	経済 (14.0)	都市 (10.8)	社会 (7.2)	歴史 (6.6)
2004 (100.0)	地理 (36.1)	その他 (30.3)	経済 (10.9)	歴史 (7.1)	社会 (7.0)	
2005 (100.0)	地理 (41.9)	その他 (22.0)	経済 (16.6)	社会 (7.6)	都市 (5.4)	

注) 第5表に同じ。



第2図 3誌の引用数に占める地理学研究の比率
Figure 2. Ratios of geographic studies in the total numbers of studies cited on human geography articles in the five major journals of geography

の本では地理学の文献の引用率は第4位である。『都市空間の地理学』(加藤政洋・大城直樹)においても地理学文献の引用数は3番目である。

②地理学以外の分野については、研究分野による差異が大きく、社会学、都市学、心理学の文献

第7表 『社会学評論』における引用文献の分野別状況

Table 7. Number and share of disciplines cited in *Japanese Sociological Review*

	掲載 論文数(a)	平均引用文 献数 (b)/(a)	計 (b)	社会学	地理学	歴史学	政治学	経済学	哲学	左記以外の 分野
2003	23	15.7	360 (100.0)	231 (64.1)	0 (0.0)	7 (1.9)	23 (6.4)	26 (7.2)	7 (1.9)	66 (18.3)
2004	29	12.1	350 (100.0)	204 (58.3)	1 (0.3)	13 (3.7)	29 (8.3)	21 (6.0)	36 (10.3)	46 (13.1)
2005	47	13.0	610 (100.0)	254 (41.6)	2 (0.3)	11 (1.8)	63 (10.3)	39 (6.4)	19 (3.1)	222 (36.4)
2006	42	14.1	592 (100.0)	306 (51.7)	0 (0.0)	21 (3.5)	42 (7.1)	38 (6.4)	22 (3.7)	163 (27.5)
計	141	13.6	1,912 (100.0)	995 (52.0)	3 (0.2)	52 (2.7)	157 (8.2)	124 (6.5)	84 (4.4)	497 (26.0)

注) () の数字は%である。分野の分類は第5表に同じ。地理学と異なり、都市学よりも哲学からの引用が多いので、入れかえている。人口学からの引用はほとんどないので削除した。

第8表 地理学の単行本における引用文献の分野別状況

Table 8. Number and share of disciplines cited in the sample of books on urban geography

書 名	編著者名	発行 年次	地理学	社会学	歴史学	政治学	経済学	都市学	人口学	心理学	その他	合計
大都市衰退地区の再生	成田孝三	1987	22 (30.6)	2		3	15	26 (36.1)			4	72 (100.0)
転換期の都市と都市圏	成田孝三	1995	18 (18.0)	13		6	16	44 (44.0)			3	100 (100.0)
成熟都市の活性化	成田孝三	2005	8 (9.4)	23 (27.1)		4	13 (15.3)	20 (23.5)			17	85 (100.0)
都市空間の立体化 増補版	戸所 隆	1996	71 (75.5)	5	1		1	15 (16.0)			1	94 (100.0)
認知地図の空間分析	若林芳樹	1999	68 (27.2)		2	1	5	19 (7.6)		109 (43.6)	46	250 (100.0)
ハンディキャップと都市空間	岡本耕平ほか	2006	40 (39.2)	10 (9.8)			1	16 (15.7)		9 (8.8)	26	102 (100.0)
			2 (11.1)							11 (61.1)		18 (100.0)
都市空間分析	田中和子	2000	27 (51.9)	14 (26.9)				5			6	52 (100.0)
都市空間とジェンダー	影山穂波	2004	51 (33.1)	51 (33.1)	10 (6.5)			24 (15.6)			18	154 (100.0)
都市空間の地理学	大城直樹 加藤政洋	2006	24 (9.8)	40 (16.4)	21 (8.6)	5	2	41 (16.8)			111	244 (100.0)
地理学から見えてくる 「日本」のすがた	佐藤裕治	2007	24 (15.8)	3	40 (26.3)		22 (14.5)	16 (10.5)			47	152 (100.0)

注) () の数字は%である。『ハンディキャップと都市空間』の上段は地理学者による執筆担当部分、下段は心理学者による執筆担当部分。

を数多くあげている書がある。『認知地図の空間分析』（若林芳樹）では心理学の文献が地理学の文献を大きく上回る。『都市空間とジェンダー』（影山穂波）では、地理学と社会学の文献が同数である。『地理学から見えてくる「日本」のすがた』（佐

藤裕治）では歴史学の文献が最も多く、地理学文献は15.8%にすぎない。¹⁵⁾

③『ハンディキャップと都市空間』（岡本耕平ほか）は地理学者と心理学者の共同執筆であるが、心理学者の方が自己の分野の引用数が多い。ただ

第9表 都市社会学の単行本における引用文献の分野別状況
Table 9. Number and share of disciplines cited in the sample of books on urban sociology

書 名	著者名	発行 年次	地理学	社会学	歴史学	政治学	経済学	都市学	人口学	心理学	その他	合 計
都市と文明の比較社会学	藤田弘夫	2003	13 (4.2)	85 (27.7)	68 (22.1)	36 (11.7)	15 (4.9)	51 (16.6)	2		37	307 (100.0)
都市社会学	藤田弘夫 吉原直樹	1999	5	29 (29.6)	3	1	4	21 (21.4)	7		29	99 (100.0)
都市の社会学	町村敬志 西澤晃彦	2000	1	94 (56.3)	3	10 (6.0)	6	10 (6.0)		2	41	167 (100.0)
				53 (53.0)	7 (7.0)	6	6	6		1	21	100 (100.0)

注) () の数字は%である。『都市の社会学』の上段は引用文献。下段はさらなる研究のための推薦文献。

し、絶対数が少ないことから、これ以上の言及はできない。

以上、都市地理学の単行本を10冊とりあげ、その引用文献の傾向を検討したが、大筋において雑誌論文と類似した傾向を示していることがわかる。多くが都市地理学の単行本であることもあり、都市学の分野の文献引用が多いが、しかし、社会学の文献も数多く引用されている。

では、反対に他分野の単行本ではどうなのだろうか。ここでは社会学と心理学の単行本をとりあげて検討してみよう。

第9表は3冊の比較的最近の都市社会学の単行本をとりあげ、引用文献を整理したものである。次の諸点を指摘できる。

①『都市と文明の比較社会学』（藤田弘夫）では、社会学の文献が最多であるものの27.7%にとどまっている。この本では地理学の文献も13引用されているが、このうち日本人による成果は、小玉徹・大場茂明・檜谷美恵子・平山洋介の『欧米の住宅政策』と成田孝三の『転換期の都市と都市圏』の2つのみであり、他はすべて翻訳書である。前者の本は、大場以外は地理学者ではないから、地理学者の単著書は成田のもののみとも言えない。

②『都市社会学』（藤田弘夫・吉原直樹）においても社会学の引用は最多ではあるが、29.6%にとどまっている。ただし、『都市と文明の比較社会学』と同様、筆者が都市学に入れた成果のうち、

いくつかは社会学に含まれる可能性がある。この本では5本の地理学の文献が引用されているが、このうち翻訳が2である。

③『都市の社会学』（町村敬志・西澤晃彦）では、前2者に比べて社会学の文献が半数を上回る。この本でも地理学の文献は1つ引用されているにすぎない¹⁸⁾。この本の第3章（都市的世界の構造）では、われわれになじみの深い、バージェス、ホイット、ハリス・ウルマンの都市の内部構造モデルがとりあげられているが、ここに地理学の文献は1つも引用されていない。

上記の3つ以外に、たとえば『講座社会学4都市』（奥田道大編1999）には、成田孝三の3研究が引用されている（奥田の執筆章）。しかし、この本の第3章を成田が分担執筆していることを考慮すると、そこにはある種の人間関係があるものと考えられよう。その奥田による『都市エスニシティの社会学』（1997）には地理学の文献は1つも引用されていない。

続いて心理学の単行本をとりあげ、そこにどのように地理学文献が取り扱われているのかをみていく。

人文地理学と心理学が接近するようになった歴史は歴史学や経済学と比べれば浅い。周知のように、空間認知というテーマが注目されるようになって以後、両者は接近するようになり、人文地理学分野でもこのテーマの成果が発表されるようになった。その結果、先の『認知地図の空間分析』

(若林芳樹)にみられるように地理学の本に数多くの心理学の文献が引用されている。

では、心理学の研究ではどの程度、人文地理学の成果が引用されているのだろうか。ここでは『空間認知の発達・個人差・性差と環境要因』(竹内謙彰 1998),『環境認知の発達心理学—環境とこころのコミュニケーション』(加藤孝義 2003),『空間的視点取得の生涯発達に関する研究』(渡辺雅之 2006)をとりあげる。

この3つの単行本において、引用されている地理学の文献は、竹内による寺本潔の『子ども世界の地図』(1988)のみである。他の2人は地理学の文献を引用していない。

人文地理学における空間認知の研究は確かに日が浅いが、単行本としては、先の若林(1999)の他に『都市空間における認知と行動』(岡本耕平 2000)が刊行されている。しかし、21世紀に入って刊行された加藤と渡辺の著作には、この若林と岡本の単行本をはじめ地理学の文献は1つも引用されていないのである。心理学者が環境や空間という地理学になじみの深い用語を使用しているにもかかわらず、である。

IV おわりに

以上、人文地理学のアイデンティティを考えるにあたり、まず筆者の専門である都市地理学の戦後から今日にいたる研究成果をまとめた。そして、それをふまえて1971~1975年と2001~2005年の『地理学評論』『人文地理』『経済地理学年報』誌上の人文地理学の論文にみられる引用文献を整理した。続いて『社会学評論』掲載論文の引用文献を整理し、最後に都市地理学と都市社会学、心理学の単行本をとりあげ、研究文献の引用状況について整理した。以下にまとめをしておこう。

戦後、今日に至る日本の都市地理学の研究動向について再確認しておく、地理学の主要5誌においては、都市地理学の論文数は1960年代から増え始め、1970年代、1980年代と増加を続ける。

1990年代にはやや減少するが、21世紀に入って再び増加する。人文地理全体に占める比率も上昇してきた。

都市地理学の論文を点的分析と面的分析とに分けると、初期は前者の方が多いが、次第に後者が多くなり、現在では後者の研究が大きく上回っている。計量的手法を用いた論文数は減少し、代わりに人間そのものや人間集団に注目した論文数が増加した。都市機能研究の論文数と従来のカテゴリーでは分類の難しい研究論文の数が増加したことも重要な点である。さらに、「都市を」研究した論文より「都市で」研究した論文の増加も指摘しておかなくてはならない。

1945~2005年の日本の都市地理学研究は、都市を面としてとらえ、都市をフィールドに都市機能や人間・人間集団を取り扱った研究が増加してきたと表現することもできる。

また、研究結果の記述スタイルにも変化があった。何よりも人間の生の声をそのまま記述する研究が増えてきたことを指摘しなくてはならないだろう。このことは計量的手法を用いた研究の減少と表裏一体のものでもある。

続いて、1971~1975年と2001~2005年の『地理学評論』『人文地理』『経済地理学年報』に掲載された人文地理学の論文の引用文献の推移をみた。その結果、1論文あたりの引用文献数が増加したこと、地理学からの引用率が低下したこと、かつては歴史学と経済学からの引用が多かったが、最近では社会学からの引用が増加したこと、そして、「その他」つまり、多くの分野から引用するようになったこと、といった諸点を指摘できた。

続いて、2003~2006年の『社会学評論』掲載論文を対象に、上記と同様の整理を試みた。その結果、地理学に比べて社会学の論文は自分分野からの引用が多いことがわかったが、何よりも地理学からの引用が極めて少ないことが指摘できた。

同様の整理を単行本についても行った。著者による差違はあるが、多くの本において必ずしも地

理学からの引用が最多ではなかった。とりあげたサンプル数は少ないが、社会学の単行本においては、地理学よりも自分分野からの引用が多い。何よりも地理学の単行本が社会学の成果を多く引用しているのとは対照的に、社会学の単行本には地理学の成果の引用は少ないものであったことを指摘しなくてはならない。

さて、われわれは以上の事実をどのように解釈すべきであろうか。社会学や心理学において地理学からの引用が少ないのは、これらは地理学の成果を評価していないことを意味するのだろうか。社会学が地理学より政治学や経済学の成果を多く引用している事実をみると、そのことはある程度あてはまりそうではあるが、しかし、あまりにも地理学の成果に無知無頓着であるということも指摘しておかなくてはならない。

一方、地理学者自身、自分分野からの引用率が低下している事実をどのように考えるべきだろうか。否定的に考えれば自分分野を評価していないということになるし、肯定的に考えれば、地理学者は好奇心が旺盛で他分野の成果を労をいとわず渉獵しているということになる。たぶん、両方なのだろう。

また、既述したように、最近の人文地理学の論文の記述スタイルには社会学のそれと似たものが少なくない。他分野の成果や方法を意図的に無視することはもちろん正しい姿勢ではない。しかし、無批判的に他分野の成果や方法を採り入れることも褒められたことではない。地理学界に所属するものとしては、自己の立脚点を明確にし、他の学問分野と対峙する姿勢が必要なのではないだろうか。そして、地理学の成果の有効性をもっと他分野にアピールしていくことも求められる。そうでなければ、人文地理学は崩壊と消滅の危機すらあるということを肝に銘じておくべきだと考える。筆者の意図は十分に言い尽くせたわけではないが、ひとまず筆を置きたい。(愛知教育大学教育学部)

注

- 1) これについては、拙著『20世紀の日本の都市地理学』古今書院、2003を参照。
- 2) 田辺健一「都市地理学の発達」(田辺健一・渡辺良雄編『総観地理学講座16 都市地理学』朝倉書店、1985) 1-11頁。
- 3) 言うまでもないことであるが、各誌の掲載論文は何地理学であるかを書いているわけではないので、第1表の分類は筆者の判断による。また、ここでいう論文とは、論説・研究ノート・短報・展望・総説のことである。
- 4) 2006年の地理学評論に杉浦芳夫が中心地研究を発表したが、そのフィールドはオランダである。(1)杉浦芳夫「アイセル湖ポルダーにおける集落配置計画と中心地理論」地理学評論75-11, 2006, 566-587頁。森川洋は市町村改革問題への中心地理論の適用の可能性を述べたが、その研究のフィールドはドイツである。(2)森川洋「ドイツ農村地域における市町村地域改革と市町村の現状」地理学評論 78A-7, 2005, 455-473頁。
- 5) 阿部和俊「日本の主要都市における経済的中枢管理機能に関する研究」地理学評論46-2, 1973, 92-106頁。
- 6) 高橋伸夫も同じ意見を述べている。(高橋伸夫・菅野峰明・村山祐司・伊藤悟編『新しい都市地理学』東洋書林、1997) 18頁。
- 7) *Geographical Review of Japan Ser. B* 掲載論文を含む。
- 8) 杉浦真一郎「特別養護老人ホームの立地と入所先選択をめぐる現実と理想的条件—岐阜県東濃老人保健福祉圏域を事例として—」地理科学59-1, 2004, 1-25頁。
- 9) 中村昭史「社会的ネットワークからみた大都市近郊住民の近隣における社会関係—埼玉県鷲宮町旭町地区を事例として—」地理学評論77, 2004, 695-715頁。
- 10) (1)中澤高志・神谷浩夫「女性のライフコースにみられる地域差とその要因—金沢市と横浜市の進学高校卒業生の事例—」地理学評論78, 2005, 560-585頁。(2)中澤高志・神谷浩夫・木下禮子「ライフコースの地域差・ジェンダー差とその要因—金沢市と横浜市の進学高校卒業生を対象に—」人文地理58-3, 2006, 78-96頁。
- 11) 田中和子『都市空間分析』古今書院、2000。
- 12) (1)内藤正典『アッラーのヨーロッパ—移民とイスラム復興』東京大学出版会、1996。(2)西部均「建造環境としての街路照明と近代都市社会のダイナミズム」地理科学54-4, 1999, 1-21頁。(3)Cohen, B. J., *The Geogrphy of Money*, Ithaca: Cornell University, 1998。本山美彦・宮崎真紀『通貨の地理学』シュプリンガー・フェアラーク、東京、2000。
- 13) 因みに、日本社会学会の会員数は約3,500名、日本地理学会の会員は約3,100名(いずれも2005年)である。したがって、この差は会員数の多少とは無関係であろう。
- 14) 筆者の専門が都市地理学であるため、都市地理学中心となった。
- 15) この本は大学受験生を主対象にして編集されたようであるが、それならば、なおのこと、この引用文献の状況には違和感を禁じえない。
- 16) その原著者名だけを列挙すれば、ベリー、ディキン

- ソン, フリードマン, ゴットマン, ハーヴェイ(2), ノックス, ノックスほか, ラコステ, レルフ, ソールである。
- 17) (1)大友篤『日本の人口移動』大蔵省印刷局, 1996。
 (2)阿部和俊『日本の都市体系研究』地人書房, 1993。
 (3)荒山正彦ほか『空間から場所へ』古今書院, 1998。
 (4)ベルク A.『都市のコスモロジー』講談社, 1993。
- (5)ハーヴェイ『都市の資本論』青木書店, 1991。文献としてではないが, 同書の35頁には, (6)田辺健一・渡辺良雄編『都市地理学』(総観地理学講座16, 朝倉書店, 1985)の51頁に掲載されている成田孝三の図が修正されて掲載されている。
- 18) ハーヴェイ『都市と社会的不平等』日本ブリタニカ, 1980。

On the Identity of Human Geography : Focusing on the results of urban geography studies in Japan

ABE Kazutoshi

Aich University of Education

The purpose of this report is to consider the identity of the discipline of human geography, focusing on urban geography. In order to do this, the author first examined the urban geography articles—research essays, short reports, research notes, views, and editorials—published in *Geographical Review of Japan*, *Japanese Journal of Human Geography*, *Tōhoku Geography Quarterly*, *Annals of the Japan Association of Economic Geography*, and *Geographical Sciences* from 1945 to 2005, considering them from the three viewpoints of: 1) whether they analyzed cities as points (point analysis) or areas (area analysis); 2) whether they analyzed cities or phenomena in cities; and 3) the changes apparent in the descriptive style of analytical results.

As a result, it was clear that the number of urban geography studies had increased between 1945 and 2005. Moreover, the following points became evident: 1) a decrease in point analysis studies; 2) an increase in area analysis research; 3) an increase in studies of urban functions; 4) a decline in studies using quantitative methods; 5) an increase in studies that looked at people or social groups; 6) an increase in studies hard to classify by existing categories; and 7) an increase of studies 'in' rather than 'of' cities.

As for changes in the descriptive style of analytical results, studies recording the actual voices of those surveyed increased. This is a descriptive style seen in folklore and sociology.

Next, the mutual interaction between human geography and other humanistic and social science fields was considered from three perspectives: 1) the research citations listed in human geography articles published in *Geographical Review of Japan*, *Japanese Journal of Human Geography*, and *Annals of the Japan Association of Economic Geography* from 1971–1975 (earlier period) and 2001–2005 (later period); 2) the research citations listed in articles in *Japanese Sociological Review* during 2003–2006; and 3) research citations listed in single-author books.

The results: 1) In the geography articles, the number of citations in each article had increased. 2) But the proportion of citations from within the discipline of geography itself declined. 3) In the earlier period, many of the citations were from the fields of history or economics, but in the later period the citations from sociology increased. 4) In the later period, there was an increase in citations from many 'other fields'.

In the articles published in *Japanese Sociological Review*, it was evident that: 1) citations from within the field of sociology were proportionally higher when compared to those from geography in geographic articles; and 2) there were extremely few citations in sociology articles from the

field of geography. This trend was about the same in single-author books.

How should we think about these facts? Does the fact that citations from geography are so few in sociology (and not only in sociology!) mean that geography's research findings are not valued? But surely it must indicate that they are ignorant of and indifferent to geography's findings.

On the other hand, how should geographers themselves think about the fact that the level of citations from their own discipline has declined? If one reacts negatively, it means they do not value their own field, but if one reacts positively it means that geographers have an abundance of curiosity and spare no pains in hunting down the findings of other disciplines.

Along with the changes in the descriptive style of analytical findings, as people who have chosen the field of geography, surely we need to seriously reconsider our own standpoint and the identity of human geography. We should be deeply concerned that if we are lax in this effort, it may mean the withering and even extinction of human geography.

Key words : identity of human geography, urban geography, studies of cities as points, studies of cities as areas